

色彩は光の受苦である

高橋義人

「色彩は光の行為である。行為であり、受苦である」。これは、ゲーテ『色彩論』緒言のなかにあるゲーテの言葉である。この言葉は志村ふくみ先生・洋子先生の関心を特に惹いたものだった。

志村両先生がこの言葉に出会われたのは、1982年刊行の『ゲーテ 自然と象徴』（富山房）においてである。これは私が編んだゲーテ自然科学論のアンソロジーで、この本をたまたま読まれた志村ふくみ先生は、1985年6月15日放映のNHK教育テレビ「こころの時代」の対談相手に私を選んでくださった。「いのちを紡ぐ」という番組である。

ゲーテ自然科学の二本柱は形態学と色彩論である。そのうち志村先生の心を捉えたのは色彩論のほうだった。色彩論のなかでも特にこの言葉が鮮明な印象を与えたようで、私の前でもこの言葉を何度もリフレーンのように繰り返されていた。

原語はドイツ語で、„Die Farben sind Taten des Lichts, Taten und Leiden“という。これはドイツ語としても美しい表現で、ゲーテはおそらくかなり吟味した上この表現を選んだ。この言葉をどう訳すか。そのことでは訳者である私もかなり苦労した。特に **Taten und Leiden** をどう訳すかでは、共訳者の前田富士男氏と何度も協議を重ねた。**Taten und Leiden** には「能動と受動」という意味もある。既訳のなかにはそう訳しているものもある。しかしこれまでの2回の講演でも述べたように、ゲーテの自然科学は何よりも「具体の科学」である。ゲーテは抽象や概念よりも具体を大事にした。**Taten und Leiden** の文字通りの意味は、「行為と悩み」である。**Leiden** は『若きヴェルターへの悩み』の表題にある「悩み」である。だが、ここでゲーテは能動的な行為と受動的な苦しみのことを言っている。それを表現するのにいい訳語は何か。「受苦」だというのが、畏友の前田氏と私の到達した見解だった。そこでこれを、冒頭に掲げたように、「色彩は光の行為である。行為であり、受苦である」と訳した。ここには「能動と受動」という意味も、「行為と悩み」という意味も、おそらく両方とも表されているからである。

志村先生が心を惹かれただけあって、この言葉にはゲーテ色彩論の要諦が含まれている。そこで今日は、この言葉にこめられている3つの意味を明らかにしたいと思う。

1

「色彩は光の受苦である」。では光は何から苦しみを受けるのか。闇である。色彩は光と闇のあいだに生じる。これは古代ギリシア以来の自然観であり、それをゲーテもまた継承している。この場合、重要なことは、ゲーテが光のみならず闇もまた存在していると考えていることだ。これは当たり前のことのようにいって、決してそうではない。最近の大学ではかな

らず授業の初めに出席簿を取らなければならない。出席簿で出席していた者には○、欠席していた者には／を記入する。／の入っている者の席は、多くの人たちにとって単なる空席であり、そこに大きな意味を持たせることはまずない。ところが空席であることが大きな意味を持つこともある。小学校から家に帰ってくる子どもの場合がそうである。この子を毎日、お母さんが「お帰り」と言って出迎えてくれる家であるとする。ある日、帰宅しても、いつもいるはずのお母さんがいないと、子どもはとても不安になる。お母さんが不在であることが、大きな実在として迫ってくる。この場合、お母さんは単にいないのではなく、「いない」ことが明らかな実在である。

私の考えでは、お母さんの不在は単なる「いない」「欠席」と捉えるのがヨーロッパの近代科学、お母さんの不在は「不安」という大きな存在だと捉えるのが、ゲーテ色彩論である。

鐘を例にとってみよう。ヨーロッパの教会の鐘楼の鐘はいくつもある。音階の違う鐘が大体4つあり、それらが同時に響いて、一種の音楽を奏でる。これをうるさい、公害だと感じる人もいるほど、ヨーロッパの鐘は強く存在主張している。それに対して日本の鐘は鐘楼のなかにひとつしかない。しかも、ボーンと鳴った後、次の音が響くまでしばらくの間がある。日本ではこの間がとても重要である。この間においてわれわれは余韻を聞く。余韻を聞くとは、鐘の音と静寂のはざまを感じることだ。分かりやすく言えば、日本の鐘は静寂を感じさせるためにあり、そのため、鐘の音を聞くと深い静寂が強い存在感をもってわれわれに迫ってくるのである。

そういうことは、ヨーロッパにはない。ヨーロッパと日本とはそういう点で正反対である。ヨーロッパ人は鐘の音や存在を追求する。他方、われわれ日本人は静寂や無のなかに深い意味を求める。静寂や無はヨーロッパ人にとっては単なる音の欠如、存在の欠如だが、われわれ日本人にとっては重要な実在である。こうした感性の下に、芭蕉の「古池や蛙飛びこむ水の音」のような俳句が生まれた。この句に描かれているのはむろん「水の音」の後に広がる静寂だが、そのことをヨーロッパ人はどれくらい理解できるのだろうか。理解できる人はそう多くはないだろう。

ゲーテはそういうことを理解できた数少ないヨーロッパ人の一人だった。第一回目の講演で、ゲーテが妹コルネリアの死が原因で深い懊悩の底に沈み、そこから立ち直るため、何も考えないようにしようとして毎日のようにアイススケートをし、その過程で「純粹」と呼ばれる状態を体験したこと、この「純粹」は禅仏教でいう「無」や「空」と同じものだということをお話した。ゲーテには明らかに「無」の体験があった。また前回の講演では、これまた深い悩みを抱えていたゲーテがキツェルハーンの山頂に登り、そこで「旅人の夜の歌」という有名な詩を書き、そこで

山々は安らぎに包まれ  
梢を揺する風も  
小鳥の声もない。

待つことだ。待てば  
そのうち安らぎを得るだろう

と歌ったことをお話した。ここで歌われている「安らぎ」とは静寂のことである。彼は芭蕉的な静寂を深く理解することができたにちがいない。

もうひとつ、ゲーテの日本的な感性を物語っているのは観月である。ベートーヴェンやドビュッシーなど、月の光を描いているヨーロッパの音楽家がないわけではないが、一般にヨーロッパには月を愛でるといふ風習がない。前回、トルコの Cappadocia で夜中ずっと夜空を見上げている若い女性日本人二人の姿を見て、ホテルの支配人が不審に思ったという話をした。翌朝、この支配人が二人に尋ねると、二人から月を愛でていたという返事が返ってきた。へー、日本人は月を鑑賞するんだ、変わった民族だと思ったとこの支配人は語っていたが、その話と結びつけて言えば、ゲーテが一人月に見とれていると、通りかかった友人が、お前、何をしているんだ、バカだなあ、早く家のなかに入れよ、と言ったであろう。それほどヨーロッパ人と日本人の感性は異なっている。

おそらくゲーテは日本的な感性、日本人的な眼で自然を見て、ヨーロッパの近代科学にはどこかおかしいところがあると思ったにちがいない。自分は「色彩は光の行為である。行為であり、受苦である」と感じるが、他の人々はそう感じないようだ。彼らは光が奏でる色彩の交響曲にあまり関心がないようだ。だが、関心がないまま構築された近代科学はどこか間違っているのではないか。そう思った。感性をめぐるそういう問題がゲーテ色彩論の根底にはある。

今日の宇宙物理学の研究の結果、宇宙にはブラックホールが多数あり、地球上を含めて宇宙にはダークマター、ダークエネルギーが満ちていること、宇宙で人間が見られる物質はほんの4%くらいしかないということが明らかになった。ということは、これまで何もないと思っていたところに何かがいっぱいに詰まっているということである。もしかすると、単なる空席だとおもっていたところ、闇だと思っていたところにも何か詰まっていた、それを日本人やゲーテは感じていたのかもしれない。無を単にゼロと解してはならないのである。

## 2

「色彩は光の行為である。行為であり、受苦である」という言葉にこめられた第二の意味は、関係性と流動性である。ニュートン光学はひとつひとつの色彩を取り出し、それらを別個に取り扱う。しかし色彩は変幻自在である。色彩は光と闇のあいだに生まれ、それらの関係性によって簡単に変化する。黄色はいつまでも黄色ではなく、橙色や赤色へと変化する。そういうことをわれわれは夕焼けで何度も経験している。日が落ちてゆくと、青かった空は次第に黄色に、橙色、そして赤紅色に変わる。変化するの、太陽という光と大気の関係が変わるからだ。この大気をゲーテは「くもり」と呼ぶ。

## 3

〔太陽の光と同様〕恒星の光も、おおむね無色でわれわれのもとに届く。しかしほんのわずかでもくもった媒質を通してこの光を見ると、黄色に見える。媒質のくもりを増すか、媒質の厚みを増すと、光が次第に橙色に近づき、やがてはルビー色にまで高まるのが見てとれる。

一方くもった媒質に光を当て、それを通して闇を見ると青い色があらわれる。媒質のくもりを増せば増すほど青色はますます明るく淡くなり、逆にくもりが透明になればなるほど、青色はより濃くなり。より飽和性を増してゆく。それどころかくもりの程度が最小の段階に達すると、青い色はいとも美しい紫色に見えてくる。

（『色彩論』教示篇、150-151、『自然と象徴』269頁）

「くもり」は光と闇のあいだにある。われわれは完全な光のなかにも、完全な闇のなかにも生きていない。「くもり」のなかに生きている。日本の茶室には独特の「くもり」がある。茶室は「くもり」を体験させる場だと言ってもよい。茶室ではものの陰影が際立つ。茶道がすぐれているのは、ふだん生活している空間の重要性、陰影の重要性をわれわれに改めて気づかせてくれるからである。そういう繊細な生活の知恵は、他国にはない。谷崎潤一郎は陰影を愛し、「陰影礼賛」というエッセイを書いた。「陰影礼賛」とは、「くもり」を愛でる美学のこと、絵画表現においても空白を大事にする日本特有の美学のことである。こういう美学も他国にはほとんどない。

光と「くもり」の関係性は時間とともに変化する。色彩も時間とともに変化する。この点をゲーテは非常に重視した。くもりが濃くなると、黄は橙に、そして赤になる。色彩は時間の流れのなかにあり、時間とともに変化する。これが重要な点だ。ところがニュートン以降の近代科学は時間を度外視し、現象を静止したものとして考察する。だが、それでは自然は分からない。ゲーテはそう考えていた。西洋の近代科学を支えている論理は矛盾律である。たとえば「若者は年取っている」や「黄色い夕日は赤い」は矛盾律からしたら間違いである。しかしここに時間のファクターを入れると、違ってくる。「かつての若者は今や年取っている」や、「先ほどまで黄色かった夕日は、今や赤い」となる。だが、あえて「かつて」や「今」を入れずに、「若者は年取っている」、「黄色い夕日は赤い」、「愚か者は賢い」、「ここにはないが、ここにある」「Aは非Aである」と言い放つのが、禅問答である。禅問答は西洋の論理では理解できない。西洋の論理が現在に執着しているのに対し、禅問答は現在を乗り越えよ、と教えているからである。そしてゲーテはこの非西洋、脱西洋、脱近代、ポストモダンの視点で自然を見る。だからこそ西洋文明が破綻しかけている今日、ゲーテはますます新しいのである。

色彩は光と闇の関係によって変化する。ゲーテはとても観察眼が鋭かったので、そうした色彩の変化をあちこちに認めることができた。ある日、彼はドイツ南西部にあるシャッフハウゼンの有名なラインの滝を訪れた。旅館に入り、部屋のなかにいると、「髪は黒く、顔は

透きとおるように色白で、緋色の胴着を着た、からだつきの豊かな娘が私のいる部屋のなかに入ってきた。薄明りのなかで私は眼の前にいるこの娘を少し離れたところからじっと見つめていた。それから娘が出ていってしまうと、私の眼前にある白壁には明るい輝きにつつまれた一つの黒い顔があらわれ、それ以外の部分、つまり輪郭のはっきりとした衣服のあったところには、美しい淡緑色が浮かびあがった」(ゲーテ『色彩論』第一巻、工作舎、1999年、54-55頁)。彼はそういう不思議な経験をした。今日で言う残像である。残像において娘の白い肌は黒色に、緋色の胴着は淡緑色に変化している。つまり反対色に変化している。この現象は色紙で簡単に再現できる。白地の上に赤色の色紙を置き、20秒ほどそれを凝視してほしい。それから色紙を取り去ると、色紙があったところには薄い緑色が見える。こういう現象はニュートン光学ではまったく説明できない。

もうひとつ例をあげよう。

冬のハルツ旅行の途中、ブロッケン山を夕暮に下りたときのことである。広大な山腹は雪におおわれ、野原も一面の銀世界で、点在する樹々や切り立つ断崖はもちろん、樹林も、巨岩も、すべて霧氷に包まれていた。折しも太陽はオーデルタイヒエのほうへ沈みつつあった。

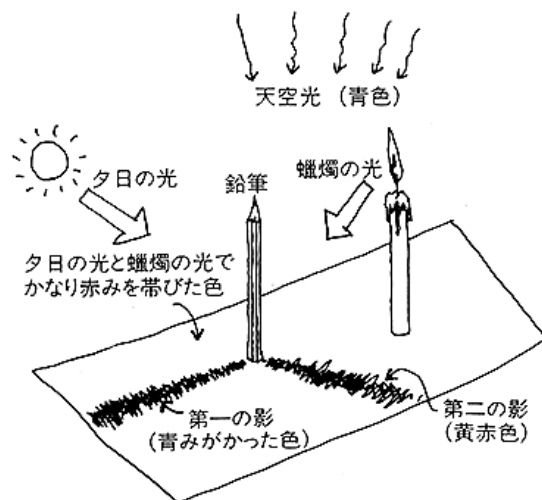
日中は雪が黄みがかかった色調を見せるために、ものの影はかすかな紫色を帯びていたが、この時刻になると夕陽に照らされた部分が赤みがかかった黄色に染められ、影の部分は鮮やかな青色を呈していると言わざるをえなかった。

しかしやがて日没に近づくと、かなり濃い靄を通してかぎりなく和らげられていた夕映えの光が、あたりをこのうえなく美しい真紅色に染めた。すると影の色は、透明さにかけては海の淡緑色に、美しさにかけてはエメラルドの緑色にも譬えられるほどの緑色に変わった。この現象はますます精彩を帯び、さながら妖精の世界に遊んでいる心地がした。というのも周囲のすべてが、妙なる調和を見せる二つの鮮やかな色彩に包まれていたからである。だがついに日没とともにこの華麗な現象も灰色の夕闇のなかに消え去り、やがて星月夜に変わってしまった。

(ゲーテ『色彩論』第一巻、工作舎、1999年、64-65頁)

この現象は「色彩を帯びた影」と呼ばれ、多くの人々がこれを観察している。色彩を帯びた影についてはそれまでも書き残した人々はいるにはいたが、ゲーテ色彩論がそれを最も体系的に記述しており、ゲーテ色彩論を通して色彩を帯びた影は有名になった。フランスではゲーテ色彩論の影響を受けたと推測されるシュブールールの『色彩の同時対比の法則』(1839)という色彩論研究書が出版され、これを読んだモネらフランス印象派の人々は、初めて木の陰に色をつけて描くようになった。ゲーテ色彩論は、ドラクロワ、ゴッホにも大きな影響を与えた。ほとんど誰もまだ本格的に研究してはいないが、19世紀のフランス絵画とゲーテ色彩論というテーマは、手つかずの貴重なテーマである。

この現象を再現しようとしたゲーテは、満月の夜、月の白色光と蠟燭の赤色光を用いて実験しているが、今日では、白色光と赤色光の二台の投光器を用いて簡単に実験することができる。



ゲーテによる蠟燭の実験 (<http://www.bonbori.com/ldd/ldd/ldt02.htm>)

この実験において影は、誰の眼にも薄赤色の反対色である青緑色に見える。誰の眼にもそう見える以上、これを目の錯覚と考えることはできない。また青緑色の影の部分の波長を測定器で測ってみると、そこには白色光の波長しかなく、青緑色はどこにもない。要するに、ここではニュートン以来の近代光学が通用しない。色彩を解明するはずの近代光学はここで破綻を来している。近代光学が破綻しているのは、それが個々の色彩、部分しか見ず、全体を見ていないからである。色彩現象を観察するには、全体を見なければならない。そこでゲーテは色彩環というものを提起する。



これがゲーテの色彩環である。左下には黄色がある。これは光に最も近い色である。右下には青がある。これは闇に最も近い色である。光と闇、黄と青は電極のプラスとマイナスのような「分極性」をなす、とゲーテは言う。黄と青を単純に混合すると、緑色になる。自然界は緑に満ちているが、それは光と闇のあいだにある色彩である。黄色をじっと凝視していると、それは橙色に見えてくる。青色を凝視していると、紫色になる。このように黄色が橙色に、青色が紫色になるのを「高昇」という。ゲーテによれば、「分極性」と「高昇」が色彩の世界、明暗の世界の根底をなす二大法則である。

橙色と紫色が結合したものが赤色、あるいは真紅である。黄と青、両者の混合した緑、黄と青が高昇した橙と紫、そして橙と紫が結合した真紅。これら六色によってゲーテの色彩環がつくられる。われわれはこのようにして色彩を把握している。色彩に関するわれわれの感覚世界の秘密、感覚世界の全体がこの色彩環のなかにこめられている。ゲーテ色彩環を使えば、先ほどの旅館の娘の黒い顔の不思議も、色彩を帯びた影の不思議も、簡単に説明することができる。「髪は黒く、顔は透きとおるように色白で、緋色の胴着を着た」旅館の娘が立ち去った後の白壁には、白い髪と黒い顔と美しい淡緑色が浮かびあがったというが、髪黒と白は反対色、緋色と淡緑色も反対色をなしている。これらはそれぞれ色彩環の直径をはさんだ反対側に位置している。われわれにある色彩が与えられると、われわれは色彩環において反対側に位置する色彩を呼び求め、色彩環の全体を保持しようとする。赤色の色紙が与えられ、しばらくしてその色紙が取り除かれたとき、赤色の反対色である緑色が白地の上に浮かび上がるのはそのためである。ゲーテはこうした反対色を「呼び求めあう色彩」と呼ぶ。今日、「補色」と呼ばれている概念である。色彩の呼び求めあいに似たものは、明暗、収縮と拡張の関係にも認められる。

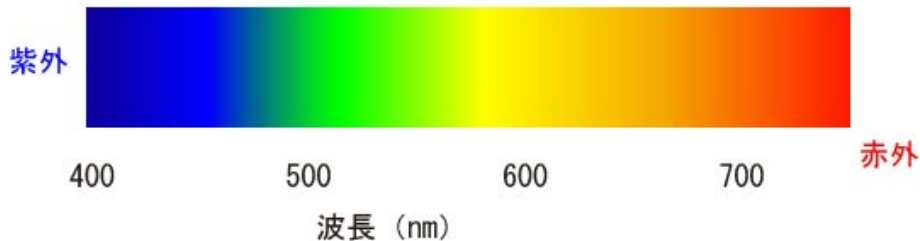
灰色の像は、白地の上に置かれた場合よりも黒地の上に置かれた場合のほうがはるかに明るく見える。黒地の上の灰色と白地の上の灰色とを並べてみると、同じ絵具で塗られたものとはとても信じられないほどである。このような現象にもまた網膜のすぐれた活動性がよく認められると思う。つまり、生あるものはすべて、自分にあたえられたある特定の状態に対してかならずその反対の状態をひそかに生み出さざるをえないのである。吸気は呼気を、呼気は吸気をかならず前提としている。収縮と拡張の場合もまた同様である。これこそが生命の永遠の公式であり、この場合にもそれは示されている。暗いものがあたえられると、眼は明るいものを呼び求め、明るさに出会えば暗さを呼び求める。このように対象とは反対のものを自分のなかから生み出してゆくことこそ、眼の生き生きとした事物の捉え方を、その正当な権利を示すものなのである。

(『色彩論』教示篇 38、『自然と象徴』290頁)

色彩の呼び求めあいは、ニュートン光学では説明がつかない。ニュートン光学では、われわれの色彩世界に秘められた微妙な襲を解明することができない。色彩世界の不思議を前

にして、ニュートン光学はお手上げである。なぜか。ニュートンのスペクトルは帯状をなして、円形ではないからである。

### 可視光の波長特性



ゲーテの色彩世界は円環をなしているのに対し、ニュートンの近代光学における色彩を波長の順に並べると、帯状になる。この違いに、ゲーテ的科学与近代的科学の違いが明確に表れている。ゲーテ的科學はあくまでも人間の感覚界に関する科学、「人間の、人間による、人間のための科学」である。それに対して近代科学は、人間を捨象してしまっている。人間がいなくても成り立つ科学、それが近代科学である。科学者の多くは、近代科学は人間とは無関係で、人間にも神にも与しない中立の立場だという。しかしそのような科学は本当に無害だろうか。科学は人間を顧慮しないがゆえに、時として人間を害することがあるのではないだろうか。それがゲーテの懸念だった。そのゲーテの懸念は、今日の公害問題や地球温暖化問題によって、恐ろしいまでに的中してしまった。ゲーテ自然科学にエコロジ的要素があるとされるのはそのためである。

### 3

ゲーテによれば、ニュートンとその一派が誤ったのは、彼らが光ないし色彩を物体と考え、それを分析すればすべてが分かるかのように思い込んでしまったからである。ニュートン光学は根本的に間違っている。そう確信したゲーテは、『色彩論』第二部の「論争篇」においてニュートンの『光学』全編を英語からドイツ語に訳すとともに、各節に仔細な注釈をつけ、ニュートン理論にひとつひとつ反駁している。

光 (*Lichter*) — 複数形をとるこの語とともに、この著作全般にわたってニュートンの犯す搾取受益と詐称受益がその幕を開ける。光、いくつかの光! (*Lichter, mehrere Lichter!*) だが、そもそもどのような光なのだろうか。(ゲーテ『色彩論』第一巻、工作舎、1999年、342頁)

ニュートンは、光は紫色の光、藍色の光、青色の光、緑色の光、黄色の光、橙色の光、赤



色の光の7色から成り立ち、これら7色を合わせたものが白色光だと考える。ゲーテは、これがまず間違っているという。ニュートンの考えを敷衍して言えば、頭・首・胸・手・足の五体からなるのが人間である。これはそれなりに理解できるが、しかしばらばらにされた頭・首・胸・手・足を合わせれば人間ができるかと言えば、首を傾げる人が多いだろう。部分の総和は決して全体ではありえないからだ。

別の例をあげよう。子どもにとってお母さんは、やさしい人かガミガミ叱る怖い人である。お母さんはテレビのバラエティ番組を見て笑っているかもしれない。子どもの教育がうまくいなくて泣いているかもしれない。ならば、お母さんとは、「やさしい人」+「怖い人」+「笑っている人」+「泣いている人」である、と言ったら、それは違う、と思う人が多いだろう。そして彼らは、「やさしい」「怖い」「笑っている」「泣いている」はすべて同一の人物の示す多種多様な表情だ、と答えるだろう。

それと同じようにゲーテは、紫、藍、青、緑、黄、橙、赤の7色はすべて光が行為し受苦したときの表情なのだ、と考えた。そして色彩の呼び求めあいを説明するには、7色よりも6色にしたほうが良いと考えた。

「色彩は光の行為である。行為であり、受苦である」。この命題によってゲーテが言おうとしているのは、色彩とは光の示す表情なのだ、ということである。色彩は光と闇のあいだ、「くもり」のなかにあり、光と闇の関係、「くもり」の濃さに応じて多様な表情を示す。光のその表情を読み取ることが色彩論なのだ、というのである。

これは当たり前のことのように聞こえるかもしれないが、決してそうではない。色彩にとどまらない。ゲーテの考えでは、われわれが自然界で観察するすべてのことは自然が示す多様な表情であり、自然科学者に求められているのはその表情を読み取ることである。ところが自然の表情を読むのはなかなか難しい。これは、人の表情を誰もが簡単に読めないのと同様である。そして近代自然科学は、自然の表情を読むことをとっくに諦めてしまった。苦手だからである。表情を読む代わりに、近代科学は、自然界のさまざまな事物や事象をすべて物体と捉え、それを分析すれば、すべてが分かると信じ、表情を読むことには眼をふさいで分析作業をつづけてきた。先ほどあげた例で言えば、人間を人体と見なし、人体を頭・首・胸・手・足の五体に分割し、それで人間が解明できると考えた。この見方をさらに推し進めれば、五体を細胞に分割し、細胞をさらにDNAに分割することになる。だが、そうやって分割することによっていったい人間が本当に分かるのだろうか。科学の進歩によってたしかに人体の仕組みは以前よりもよく分かってきたかもしれず、治る病気も増えてきたかもしれない。だが、はたして人間に関する知は、古代ギリシアや古代ローマの時代よりも深められたと言えるだろうか。言えないのではなからうか。これがゲーテが投げかけている問いである。

私は来年の3月で、教壇に立ってから50年経つことになる。この50年間、色々な学生たちを見てきたが、明らかに昔の学生のほうが他者の心の内を慮ったり、気遣いをしたりする能力があった。そういう能力はとても大事なもののだが、そういう能力が今日、おそろしく

衰えてきた。電車に乗って 30 分、スマホを見ているばかりで、車内のことをまったく気にかけていない若い人たちがあまりにも多い。おじさん、おばさんのなかにも多い。こういう社会が昔よりいい社会だとはとうてい言うことができない。

今の科学は間違っている。そう言ったのは、ゲーテばかりではない。私はゲーテ自然科学の集いという日本学術会議公認の学会を長いこと率いてきた。この学会は昭和 44 年にできた。昭和 44 年からまだ大学院生だった頃の私に世話役が委ねられ、京都大学を定年退職するまで私はこの会を率いてきた。だが、このゲーテ自然科学の集いを創立されたのは、主に東京大学の理系の先生方と東京大学出身の理系の先生方だった。彼らがこの会を設立した理由のひとつは、癌の原因解明にあった。当時の医学・生物学では、癌の原因を何らかの病原菌やウィルスに求めるのが一般的だった。ところがこれらの先生方は、そうじゃないんじゃないか、癌は身体のバランスが崩れて生れるんじゃないか、何らかの心的原因でも生れるんじゃないか、身体全体のバランスを考慮しないと癌のことは分からないんじゃないか、部分だけ解明しても、癌の秘密は掴めないんじゃないか、そう考えた。もしかすると、西洋的な科学のあり方がそもそも間違っていたんじゃないか、いや、明らかに間違っていたらう、では、これまで誰がそんな間違った西洋的科学に異議申し立てをしたらどうか、誰もいないんじゃないか、いや、いた、いた、ゲーテがいた、ゲーテはニュートンの科学を強く否定したわれわれの先駆者じゃないか、ならば、ゲーテの自然科学を学べば、現代の医学や生物学の袋小路の状況を打破できるんじゃないか、そう思った。そこで彼らはゲーテ自然科学の集いを設立したのだった。

設立当時の大御所の先生方を私は個人的にもよく存じあげている。彼らは学界のリーダー的存在で、社会的身分の高い方々だったが、決して名声欲に捉われることも業績主義に陥ることもなく、当時の私のような若造の言うことにも真摯に耳を傾けてくださる謙虚で立派な方々だった。

これらの方々の見解を敷衍して言えば、癌は人体のあげる一種の悲鳴である。私がゲーテ自然科学の集いの世話役を引き受ける前、この会の世話役をされていたのは、三木成夫先生という、著作集も出ており、雑誌『現代思想』で「三木成夫特集号」が組まれるほど高名で人格高潔な方だった。この先生は東京大学医学部のご出身で、大学の最終年度、博士号を取るために一人の患者を与えられ、その病名を言い当てなければならなかった。三木先生に与えられたのは一人のご婦人だったが、いくら調べても風邪以外の病名が浮かばない。指導教授に「先生、もうお手あげです、降参です」と言うと、先生は、「三木君、どんな患者かね、その人をこの部屋に連れてきたまえ」と言われた。連れてこられた患者がカーテン越しに服を着替えているのを見られた先生は、「三木君、あれはチフスだよ」と言われた。「先生、どうしてお分かりになったのですか」と尋ねると、先生は、「検査データばかり見ても、病気は分からない。まず患者のすがた形を見ることが大切だ」と答えられたという。

今日、残念ながらそういう医師は少なくなってしまったが、三木先生はそのときの体験をもとに、医学において重要なことは、患者の人体の示す生きた形態と生きた表情を読み取る

ことだ、ゲーテ的形態学が重要だ、と強く主張されるようになった。検査データばかり見るのは、人体を物体としてしか見ていない医師のすることである。自然は物体ではない、表情であり現象である。本質は物体のなかにではなく現象のなかにある。これが、三木先生がゲーテとともに考えられたことだった。自然は現象であり表情である。この認識から出発して、ゲーテは西洋の伝統的な形而上学、物体の存在を自明のことと考える形而上学と訣別し、19世紀末から20世紀前半にかけてフッサール、メルロ＝ポンティらによって樹立される現象学という新しい哲学への道を拓いた。

現象を見ることが大事だ。現象の背後に本質があると考えたり、背後世界を想定したりせず、表面を見、自然の表情を見なければならない。それが大事だ。この見解をゲーテは『ファウスト』第二部冒頭の「優美な土地」のなかで表明している。第一部の最後でグレートヒェンを死に追いやってしまったファウストは、第二部の幕が上がると、深い憂鬱のなかに沈んでいる。だが、優美な土地のなかで彼は美しい自然に心を癒される。山の頂から水が滝となってたぎり落ちる。そこに美しい虹が姿を現す。色彩現象の不思議である。それを見やりながらファウストはこう呟く。

太陽はおれの後ろに引っ込んでいるがいい。  
岩礁の上を崩れ落ちてゆく滝を見つめていると、  
恍惚たる思いが次第につのってくる。  
滝は崩れ落ち、たぎり落ちながら  
無数の流れをつくり出し、  
空中高くしぶきを吹きあげる。  
ああ、なんと美しいことだろう、たぎり落ちる水の流れから生れ出た  
彩り豊かな虹の橋よ、流転のなかの永遠よ。  
おまえは鮮やかな姿をあらわしたかと思えば空中に消えてゆき、  
あたりにかぐわしく涼しい霧を撒き散らす。  
虹こそは人間の努力を映し出す鏡だ。  
虹に思いを馳せればもっとよく分かるだろう。  
人生は彩られた映像としてのみ掴めるのだ。

(『ファウスト』第二部、4715-4727行)

「太陽はおれの後ろに引っ込んでいるがいい」とファウストは言う。太陽や光は実体かもしれないが、そんなことはどうでもいい。太陽よりも太陽が照らし出す映像を眺めよ。太陽はさまざまな映像を映し出すが、それらは虹の現象に端的に表れている。虹は彩り豊かで美しい。だが、その美しさもほんの一瞬のことで、「鮮やかな姿をあらわしたかと思えば空中に消えて」ゆく。現象は時間のなかで生起し、はかなく消える。だが、その美しさには真実がある。永遠がある。だからこれは「流転のなかの永遠」である。そして考えてもみよ。人

生ではすべてが移りゆく。人生という時間の流れのなかには、辛いこともあれば、楽しいこともある。悲しいこともあれば、喜ばしいこともある。それは、虹のなかに赤や紫、橙や青が見えるのと同様だ。「虹に思いを馳せればもっとよく分かるだろう。人生は彩られた映像としてのみ掴めるのだ」というのである。

人生ばかりではない。ゲーテは、自然をも映像としてのみ把握しようとした。ところが自然を映像としてのみ把握するのは、意外と難しい。映像としてのみ把握するとは、頭を働かせず、見ることに専念するということだ。それには集中力がいる。眼の前の自然の映像に対する深い愛情がある。愛情のない人は、ずっと見つづけていることができず、つい頭を動かして考えはじめる。見ることに専念せず、すぐに頭を動かす科学者は自然をあまり愛していない。どこかに欠陥がある。そしてそうやって自然を見ずに頭ばかり働かせてきたのが、西洋の形而上学、西洋の近代科学である。それに対してゲーテの現象学的自然科学、現象学的色彩論は、自然を愛し、自然を注視する人しか、それを行うことができない。頭がよいだけでは、ゲーテ的科学的門人になることはできない。西洋の近代科学が頭のよい人たちのための科学であるとすれば、ゲーテ的科学的科学は自然を真に愛する人たちのための科学である。つまりゲーテの自然科学は、西洋の哲学史・自然科学史においてじつに革命的な意義を持っているのである。

そのようなゲーテ的色彩論に、志村ふくみ・洋子先生は強く心を惹かれた。お二人は、ゲーテ的色彩論のなかにかげがえのない真実を見いだされた。この色彩論が、自然を真に愛する人によって構築されたものであることをすぐに見て取られた。その自然観が日本人の自然観と通底するものであることに気づかれた。そしてゲーテの自然科学をさらに深く読みこみたいと思われた。その後、自分自身、自然を深く読みこまれたことの証として、お二人はいくつもの作品を残され、そして今も残されつつある。願わくは、このアルス・シムラの生徒方も、ゲーテや志村ふくみ・洋子先生のように自然を愛し、自然の映像、人生の映像を見つづけ、その成果を美しい裂、すばらしい着物にして発表していただきたいものである。